57X
51
7

訓幼字義

學七

四端之心　良知良能

才志　意氣

愛媛縣立圖書館藏

幼字義卷之七

四端之心　凡十條

四端ハ孟子ノ言ニシテ惻隱羞惡辭讓是非ノ心ヲ仁義禮智ノ根本トシ給フ事ハ

人ミナ生ルヽ時ヨリ具ヘ給フ物ニシテ此心ヲ擴充スレバ聖賢ノ域ニ至ルベシト

ノ事ニ候ヘドモ其ヨリ以下ノ人ニ於テモ此心ヲ擴充スレバ其人ノ分ニ應ジテ

善人ニモナリ得ベキ事ニ候ヘバ此心ヲ擴充スルヲ專一ニ心掛ケ申スベキ事ニ候

人ノ惡キヲ聞テ惡ミ憎ムハ羞惡ノ心ニテ候ヘドモ其惡ミ憎ムノ心ヲ以テ己ガ

惡キヲ惡ミ改ムルヤウニ心掛ケ申スベキ事ニ候

取

是れ人物ともに有る所の
ところこの四者こそ凡人ならぬ生まれ
としてあるとかし故に孟子曰人之有斯四端也
猶具有四体也と言われこれを端として端的
とよこころわりこの四のこころを拡充
おもてきい仁義礼智の性を具する
ことこれを四端という。又曰惻隠之心仁之
端也羞悪之心義之端也辞譲之心礼之
端也是非之心智之端也

後世論を列して端と
するは非也

一〇宋朝已来仁義礼智を人の性に具する
未発の理となして
端を列するの弊へ四端の端を端
緒と訓をる弊にて孟子のこころをふかく
物のもと口の事にて仁の理をふかく
て悦怡のこころから義の理かふかくなる
等悪のみを恥るに礼の理外ふかくなる
辞譲のみをかろんじ是非の智ふかくなる
是れのみとおもうこと物の本ふかくて

この小口の外へ見えるって集注云猶有
物在中而諸見於外也とそかりも場の
ことを如此申てもあれを多く場所の義か
ちかよることと古注と異なのを考て仁義
礼智の称かよりとうりとつゝまやうに
大本と枝なのと二義にわかちおこりてを説ず
消ものを添て消ものいつゝてそれ
ゆゝふまやか若くは如此若泉如意とも仁

て物の小なるものゝ称かは大かあるを
みうちの小のあるを等かあるを
一〇場所を場所とも訓すれとも
実の義のれちうてなるとも訓すれとも
法を乃学ことを遠ちゆふ仁義
礼智の義も同じ場のその列もこれ
まうて お遠ちを称りそれちのいも
ゆゝ道ちとまちの人のり事の上下

あれ与七の典
のほ与上所そ
遺通と之仁義
一事み能てよか
或い一人ふなひ
てをお及ふ大小
人の利益をほ
とよこれをりみ

与与をいい与
申ふ收攻のん
又曰先王有不
政と不忍人の
不忍人の政ふ
おいはんをの仁
云ひるを乃典
根本法ひみ

收攻のんよれを
仁心
心
收攻のん与
忍人之心斯有不忍人之
仁ふ与收攻のんの
仁かりそれいてを
收攻のん乃和
て收攻のん与仁れ
義要辞語そお乃

はき来るり四端の論を場事の等ふ
とふいこの中へあり
一日後世ふこれを論結と訳すれ仏なり
体用の説をよく心性不動の地を仁
の本体とす那一般的説性あるの里面
運用ふあるをもって用と立事物
差悪鮮論をれのんこれを名て性
ふ号性ふ具るる仁の現外みあるて

悩説の性をあるこれみよって空場の論を
別して場結をふうこれ仁を未発
の理をこめこれをあるみよってこのつる
空場の論を場結をふれいうるとも
事れんの学をあるこれ暴をもあ
一日接をふをを書をあるを
ちり午せんのあるを書をあるを
家朝ふ来こあふ午不同先をあの

ゆる摘まんとふこと或は遠さと或は推と或は乱ち彼
うつ小なるも乃ちと大ふするこ小児の書をおふたゝめまいろは
をなすひなひ活仏を写すこと
字のみをおもひ及しかくふ
ふ物を抑さるとこゝろの日しみ協の
ひろくおもてつゝ一すこ一すこ
をとくゝ一すこ一すこ
後をてくくみ人を後のくゝの
礼をを性の理をふ
てゝなおのゝ甲ふくゝ神ふ色
のかゝとみひろくゝ多抄文ふ
ゝ多多往ふ即此推廣而充満其本然

之量則其日新又新將有不能自已
者矣○見勿○而學之人○事往の捨
之○而○事來の○之○字家ヨ詢ヲ自己ニ求ム
之ヲ○其ヲ古義ヲ(朱のそれあるまま)
ヲ○ヲ○ヲ○

不く行はれて。到極まりてあり。
非具有識盗者元類至愚之書也
あり。けだしこれをきおわれを盗みて
あへ大小のよりかかるものもこれ有るみる
を盗むにいたれるもの也。百工其
業を一つにして。天元仲子之操
如而可者也と。みるべし。北清の陳仲子
清白をもとなおこれ天の定めの祝

を主。けだしこれくみるこころを
てくおの祝をもとめ。今之問のをもとめ
ずすの書の昭明のれをきってそ
のごとり。四端のんをえるはしるかうをも
色として仁義をてくみなおしてわ士を
うおの孔を欲わの学案傳の
のもとよ祝もおし

集注云四端在我随処発見知皆即
此推廣而充満其本然之量とそれ
も言よのもかかるもす 先儒のこゝに仁
義の性中より具ることを外まわれ
まれるをつくし尽をつくすとこれをひろめ
発すとこゝをもつてこれをひろめ
ひろむるとを混雑してこゝに
自性のそなはるをもそこなはるゝ
をかしき性の善をもとめんつとめよ
性善玄玄良能の説をこれり移文丹
一言半句人よこのんで乃ちふ具ろう
とそも我註稿ふあけてかゝ丹所汝深人谷吉林
不思人之心者ろ
子のてをいつ
ゆゑもとまれり

一〇発見ふ紀て按えまして。弟盾すること
毎一。ねそるれ。林檎收陸えふ。按ふ
の母文んとするをてみそう。以羊当牛
のそうの牛の殺酸ふそしておそう。
きれよ。おのふ使ふてしかし。三のん参見すしかし。
ちん。津ふてまふ必参えを
使もおーふんとおよすい。按えの

工夫。つ野のおふしし。諸壺字義云
二十字左ヒ一つ文とそそう。ヒふまよ
君子遠庖厨のはそう。かみ参見をふそよ
庖厨の消ふ。側代ふ。ふ。ヒ。ヒ。ヒ

元不欲害人之心而仁不可勝用也
人
夫そも言もて知ることの
人の日々為すをふみて
考究と名づけ
皆々よみて
なれど、誤事を
一日学問のことに
その名目に云ふところの
のごとく
のみ

その事をわたくしてい
なまなをおれもを
をふあれ
いまの乃雲人
ものそれまでの
代事
あしまもみ
を見れ一室
ず接えて
のみ
ん
ぐ
ん
ぐ
ん
ぐ

て政律の事を行ひ及ぼし等の事
ようしくうやまひ事へまつりて
有王の一年をこころもとのごとく
仁心のおす所ともれも換えやせ
ずしてこれ士庶をあはれみ給ふ
今を言ふ仁徳備はれる君人の性
てゆもおもほすべし此所に不思議
一年をこころすみやかのごとく

十三

おして人民の上及すときは不義の合
戦をやめて等民の性命を救ふ
是等仁なり故に人皆有所不忍違
之於其所忍仁也又云仁者以其所愛
及其所不愛又云古人之所以大過
人者無他善相其所為而已矣と
仰ぐこの心をもて君を敬ひ
おそれてもはきてもこの事
この意にて古を救ふ道

人を捨てと

一良知良能

一〇良心許性ゟ出ル故ニ良ク易直ニシテ
わるゝ
ト出ラレテ分別ヲ加ヘ意ヲ
物ヲ
生ズルヿヲ
ヲ
ヲ

●言をなおざりにせず
生ずる時をしばらく
しばらくをもって
うるおいをもって
日きてみてこれを
凡人の
真の仁者といい
道あるを仁者
仁者

●凡人生のてきを待ち
そうよくかすて
良ある良能
而智者良ある
羽うあるあ
のごとくまた
新をもってこれ
呼ぶのまむ

知良能也ト云ヘルトコロ
ヲ考ヘ見ルニ孟子ノ
道外ニ事ナキ所ノ
化人ニ及ボスモノ自ラ
持ツテ人ニ仁義ヲ
ムルト云ヘル今別ノ
ムルニ於テハ
ノ如キ

又曰孩提ノ童無不知愛其親及
其長也無不知敬其兄ト云ヘル孩
笑也ト注シテ孩
時ヲ云ヒ
ノ人ヲ抱テ
ヲ慕フ事ヲ
又ハ
ノ如キ

の名、我あるを認識とみするときいふなり
修習の名外ならず、その付焼刃をもて人の
知性よりするをいふ、その性あり、そのよの
孩提の童心未だ発せざるの性を写すの半をさす
蓋し、かひこ、まゆ、これ兄をしめす性
なるものなり、その性の名をもてこれを
名づくるの仁義となすを分

事あるにこの言あるを解をおよそ
ろもるより外のの半をおよそ
ねこの言のお弘ふるに親に仕へ敬を
義也無使達之也と門弟
も明らかなるをもて
●陽明王子致良知の
自己の心を明らかにするをもて

みねこすることあるそのてき抜出
すまでも畢竟見性の玩よろこ
ぶるあるそみかっ
てい毒子よりあつ先哲ともよ
ぶあるこの二つをこれあるそく致
良知ゝ外ならず先哲ともよ
朱子の学致知格物をすべてそくこれ
を外に
みてその実用
を欠くあるこの二つをこれ
を外にみてその実用を欠くあるこの二つをこれ
を外にみてその実用を欠くあるこの二つをこれ
を外にみてその実用

○才

才という性の強きもの善悪ともに才物材
質人之施也この活用もあるべきことと
大木のごとく棟梁の用をなすものあるごとく
人の手をもとこころの用をなすものあるごとく
故に才質才能などと用ひ又
熟用
姓の名あるごとく才雑という才
不名とあるごとく皆才能ようの用
すべきなり

●孟子若夫不
ゝて程子
生
の注
云
云
二
孟子
云
云
の
ゝ
ゝ
ゝ

の性をつくし程の花木とも
草花あの色彩のものもそれ
ゆへ才ある木ともあるとも
わるうまるてもいもとも
●才とそのさまざまを名づけても
人のさとさを才とよびて又
而一きてまも才をもつて
書右才とも不能尽其才者と
なりも才をもつて叫ぶよりそう

天富来千卯多頼云宋王景多景
非天之降才与殊也 無所以防閑也
学世とうこのところ才とよの
をもて名をあらわしてよふて多
きオもう景多きもオみうこれを
才てもとそれともてとうおる
とう各別 ふこのみとうおる
かもまうこうう防閑するよりて性
なもそれおれもありもてをあすり
かすとからうとう才とよものの人の

為不善非才之罪也と云ふ

多あり（ママ）て皆我の及をおよ（ママ）
をこゝろすもこの手うち又皆とゝのを
さゝ指よりもこのるうちそれい
ゝそれ。そのみありさまてゝも
りんこゝろもそれのもとをみて
るんありさまとき〳〵生玉
うちもまこと空をみよ
オのあるさまのうちオのみ
ありさま

志

○心之所之謂之志 抱の下の方に
抱の下の方に
事を記すを志 志
この志もこれに同じ
詩言志 志
志 志
志 志
志 志

を取りあつめ 志
志 志
○北渓字気文云才志於利 侵入火略
志 志 志
志 志 志
志 志 志

不仁ノ文通ト云ヲ一ツ書ニ僧
ノ方ニテ通徹ト云字ヲ善意
通ノ字ヲ用ヒ
通ノ字ヲ用ヒ
ヲ志ト
志ノ字ヲ
志ノ字ヲ
志ノ字ヲ

意

口言ふ言ふ意ふ言ふ言ふ言

只是教室使之参観一会處處とそ
其活ん之形として遠(遠)之ものとそれも其ま
てをみ(定)之ものとそれも其ま空破(破)
仕ん之ま之ま之ま之ま之ま
平てをそ之ま之ま之ま之ま之ま
なれこ平ら之ま之ま之ま之ま
ら之ま之ま之ま之ま之ま
をみ之ま之ま之ま之ま之ま

のをこ之ま之ま之ま之ま之ま
すり先傷の好之ま之ま之ま
とをとき之ま之ま之ま之ま
ま之ま之ま之ま之ま之ま
いて用之ま之ま之ま之ま
体之ま之ま之ま之ま之ま
数体をそ之ま之ま之ま之ま
数をそ之ま之ま之ま之ま
ら平てそ之ま之ま之ま之ま
まらおりそ之ま之ま之ま之ま

傷寒の傷とみる証候の傷とみる胸膈の傷かぶるみなかぶれまた胸中にくるものにおかされてみだりにくるしむものみな傷寒なり

●或のいはく用られさるをもつて傷寒の字を下す甲

ものゝ体勢の差別あり

口試云意の字ふれてきこゆるときこゆるときこえざるときこえざるときあり

是にて其方一伸ばかりこゆるときこえざるときこえざるときあり

ときこえざるときこえざるときこえざる

○或人の云語を字ありのまゝに書のせたるを讀て物云の中の此詞（こと）の用ひ樣を考へ見るに一二一反ともたゞしかりけり　たゞしかりけりとあるもたゞしかりけりとあるも其意同じかるべきを何ぞ其の異同ありたるや此の異同を一向に心得ざるまゝに字ふのまゝに書のせたるなるべし

○或人の云語を字ありのまゝに書のせたるを讀て物云の中の此詞（こと）の用ひ樣を考へ見るに一二一反ともたゞしかりけり　たゞしかりけりとあるもたゞしかりけりとあるも其意同じかるべきを何ぞ其の異同ありたるや此の異同を一向に心得ざるまゝに字ふのまゝに書のせたるなるべし

○或人の云語を字ありのまゝに書のせたるを讀て物云の中の此詞（こと）の用ひ樣を考へ見るに一二一反ともたゞしかりけり　たゞしかりけりとあるもたゞしかりけりとあるも其意同じかるべきを何ぞ其の異同ありたるや此の異同を一向に心得ざるまゝに字ふのまゝに書のせたるなるべし

○或人の云語を字ありのまゝに書のせたるを讀て物云の中の此詞（こと）の用ひ樣を考へ見るに一二一反ともたゞしかりけり　たゞしかりけりとあるもたゞしかりけりとあるも其意同じかるべきを何ぞ其の異同ありたるや此の異同を一向に心得ざるまゝに字ふのまゝに書のせたるなるべし

のうこうをみすかりて
そよ理をもとめ
ぬ法めぬをもとめ
好色をもとめ
理法とのみて
とてをもとめ
人のうわべ
みるのみにて
ぬ実のよをもとめ

のおこなひ
常にこれを守
の如く
みも非礼勿視
視聴言動
ことなおして
視聴言動
まりこと
ことのを

てんをの事ふれみて 修己
正己及身誠身の
おい人性のそれあるをあり 子
ふをて抜んとまんっまある志
学ぶ法向ふてふ川るみあ
て身を法んを法てまこをこる
まま打をもふをふて
修をを法向のふるめも ふるの
ふ法の学列を考ふし

てをはめすて修己
のよ知工をすふ
おあるをおこふ
ふをふてふ 学 羽をい
ふあるを ふふ白修のふるめて
ふをあるかふ 聖列至
すふをいふか
人のをふ道との白ひて
ふのをおふて 武列とふ

案
○案ずるに、

平和のもとらをはうさとほものの
なるものを抜こそ
○いまの世の人の
法をしらざるを
あり。生をすくはんを
聖王なのこと
まもりそうこと
家よ亦有仁義而
七つ面のるこの外よりほるにな

生をすくはんとするも
——るものあり。そは仁義の功事をあ
別よ法事あ
色砥家
家而七
こそ
七つ
○諸よ相
をそ
すろ

生命をいとなみ行なひ給ふ私人の
こころを動かして私を迎へはるばるとへ
君の事をもとめ給ふなどの事も
ありまたとこしへ
一〇法性土をいでゝ三界の火宅に
遊ぶをも生死の
ことをいとひ
ものうきを
動ずるとて

あらはしてこの二乗得ものゝ迷ひを
度のこゝろを
あらはすなり
の経まで
りなり
ありてこゝろをこうまと
をこしてこの事を
とをいふ
ありなどの
ことを

浮ノ道ヲ覇王不通(異文)ノ如ク
吾等(宇)トアラユル事ヲ行テ浮事
行ラレルヨウニ行テ居ル事ノ因ノ根ヲ
浮テ覇王ノ業ヲモ知ラヌ(へさ)
ヤウニ行テ居ルヨウナモノデ
アルコトヲ知ラヌヨウニ
スルコトヲ知ラヌ
多クノ事ヲ知ラヌ

平五

ヨウニ云ヒ
ナス事ヲ行ヒ
ノ根ヲ浮テ
テ居ル(迷ひさし)
ヲ知ラヌ
ヲ知ラヌ
ヲ知ラヌ

行ふ事をもちわれ
あれこれ等の
ま〻一ツ屋の
んをこゝにぬ
口後世まで不動
屋にあり
ず等の若き則
つゝま曰く不動
動き於
行ふ事
ま〻一ツ屋の
んをこゝにぬ
後世まで不動
屋にあり
ず等の若き則
つゝま曰く不動
動き於

非

為ものを吹てもしおもひ
をかけてもまことおもはぬ
おもをおもふ不淫於こん無おお心
ゆへとしれ誰かこの民の為財を吹て
とおもふ
ふしぎ信生君信(ぶ)君をすてめん
とおもふ君信(ぶ)君をすてめんをもあ
さのてをそれほどをすふ
ものてをそれほどをすふ
多ものもの
定本

仁義を稱するを許行ふことを
きゝてらの言を來てこゝを垂て迷ふ
てをとゝ吾知言知言吾治
吐こゝをいひてこゝ「お仕なあ
こゝて「ら教のこゝをきゝてもいつも
まゝもあるこゝ死やのゝ。「ら仕も
事實ふあるこゝして神のまゝする
てをこゝをセこゝよゝ言こゝを不思
とゝ語こゝの「ら仕のこゝ

存則具遠舍數不遠矣
もの仁者の仁をなれ
ども有の門まで行くのあるを待
て夜の半まで行くのあるを待
ここのうちの如し仁者のみを去
ものの如し

57X
51
7

云神者當中夜靜之時自存於
己而不相離矣如此則於應世之務
皆居以待之故無為而成危自出盖虚實成子之告無不
過如此實神仙之要訣也この一とそ
事用の宝之多きよりの法
とあり 幸至年
清らかなること
おそれ多くも
一冊六千二

止